

「光触媒標準研究法」について

宛先： 大谷文章教授

Cc：

件名： 「光触媒標準研究法」について

メールインタビュー 著者に聞く

大谷文章教授

著書

『光触媒標準研究法』

A5判・520頁・定価4410円(税込)・東京図書



光触媒の研究者あるいは
研究を始めようとする人にとって、
本当に役に立つ本を書いてみたい
という思いが強かった*。

脚注：そんな時間がとれるのかと
いうことは抜きにしての話。
——「はじめに」より

>脚注が非常に多いのですが、それはなぜですか？

光触媒に関連する実験や解析法について書いてみると、いっけん些末に見えること（ディテール）が重要な鍵となっていることを再認識しました。さいしょは、それもぜんぶ本文に入れていたのですが、かっこ書きが多くなりすぎて、流れがわからなくなると思い、脚注にかえました。なんと、脚注は全部で1200以上あります。

>「本当に役に立つ本」にするためにどんな工夫をされましたか？

実験手順や解析法の詳細をていねいに書くことを心がけました。書きおわってからわかった（ずいぶんのきななはなし…）ことは、このようなくふう、つまりディテールを書くことによってストーリーが浮かびあがる（そんなたいそうなものではないが）ようになっています。ストーリーとは、「これまで常識と考えていたことが、じつはそうではないことが多い」ということです。「研究とは何でも疑うこと」という著者の

思いがたつたわれれば望外のよろこびです。ただ、「何でも疑え」に対して「はい、わかりました」と言われてもこまるのですが…。

>参考文献も多く紹介されていますが、これも役に立たせるための方法でしょうか？

これまでの本や論文が「孫引き」をくりかえした結果、もとの意味が誤解されているような例をいやというほど見つけたので、この本では基本的にはできるだけ孫引きをしないようにつとめました。いずれにしても、おおもとの文献をしっかり読むことのだいじさを再認識しました。そのあたりが読者にもつたわることを祈っています。

>表紙の「あらいぐま」がとてもかわいらしいですね。

義兄の版画（詩は、くどうなおさん）です。主人公であるあらいぐまの「げん」は、なんでもあらってしらべるうちに、小石をあらって「文句あつか」と言われます。この本を書いているうちに、「この測定ではこの式をつかって解析することになっている」とか「こう計算すればこれがわかることになっている」ような常識が、じつはずいぶん乱暴な仮定や近似をつかっていたりすることがわかってきました。また、これまでの専門書や論文の内容や表記、引用にたくさんのまちがいを発見しました。きっとたくさんの人が「文句あつか」とおっしゃると思いますが、そんなときは、こう言おうときめています。「ぼくはけんきゅうねっしんだ (by げん)」。

●プロフィール

大谷 文章（おおたに ぶんしょう）
 北海道大学触媒化学研究センター教授、同大学院環境科学院教授（兼任）。
略歴：1956年大阪府生まれ。京都大学工学部石油化学科卒業、同大学院工学研究科博士課程石油化学専攻単位取得退学。京都大学工学部などを経て現職。
著書・訳書（本書以外）：『光触媒のしくみがわかる本』（技術評論社）、『ボール物理化学』（上下巻、D.W.Ball 著、化学同人（共訳））ほか共著本多数。